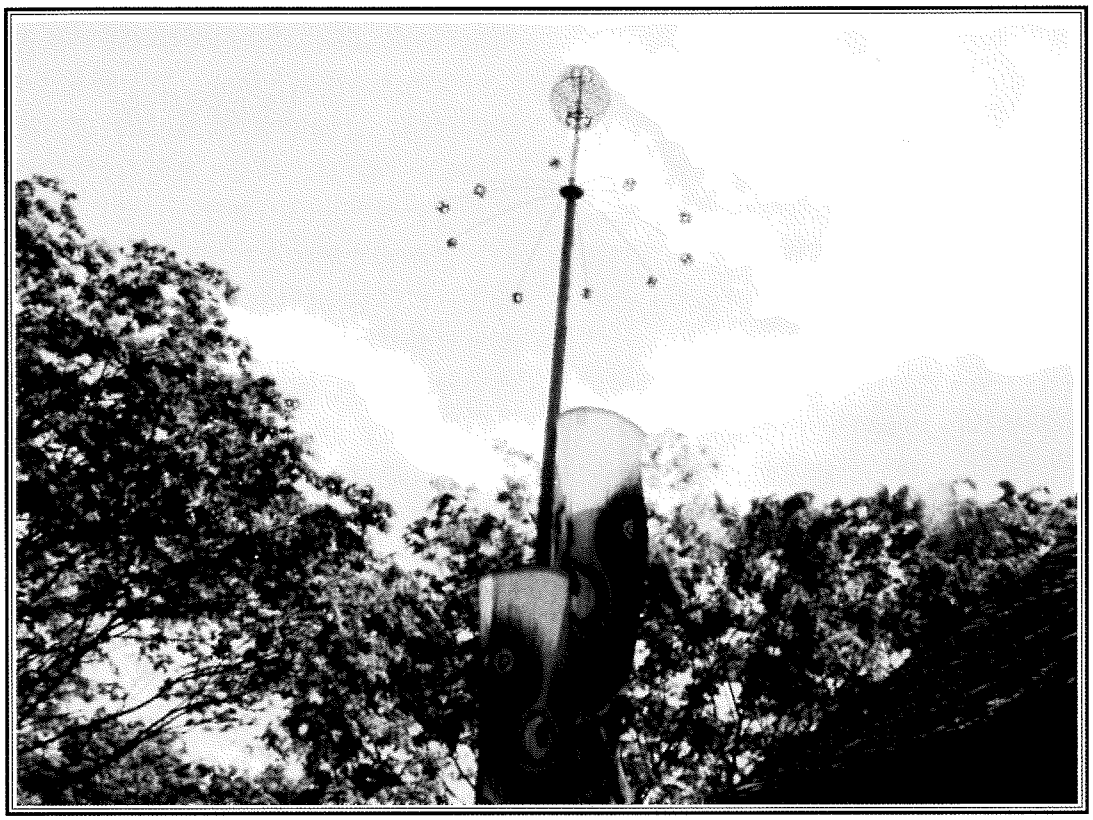
あるむぜお103

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 103　2013年3月20日



府中市郷土の森博物館内旧越智家住宅に立った鯉のぼりと棹の籠玉【2009年（平成21）撮影】

目次

1-2 年中行事の現在 in 府中
④鯉のぼり

3 展示会案内
企画展　大西浩次星景写真展―天・空の記―

4-5 ノート　蘇民将来の子孫と武蔵府中

6 知る人ぞ知る！　府中ゆかりの人物
⑧田中屋万五郎

7 最近の発掘調査
中世以降の斜行道路跡を発見

8 町にまつわる雑学講座　分梅町

年中行事の現在 in 府中

お正月から大晦日まで、日本にはさまざまな年中行事があります。平安時代より続くものもあれば、節分の恵方巻きのように最近になって広く行われるようになったものもあります。そのなかでもふるくから伝承されている府中市域の年中行事の現在について紹介します。

④鯉のぼり

5月5日の端午の節句にあわせて、主に男の子がいる家で飾られる。吹き流しを含め４～5匹程度の鯉のぼりが4月中旬～5月初旬に空を泳ぐ。そのほか男の子が生まれたはじめての節句には、親戚、近所より武者人形や兜、魔除けとも言われる菖蒲の葉などが贈られる。

柏餅を食べる風習は現在もおなじみ。

年中行事の現在 in 府中

④鯉のぼり

「♪屋根より高い鯉のぼり」などとうたわれてきた鯉のぼり。5月5日の端午の節句の際、武者人形や菖蒲などとともに、男の子の生まれた家に用意され、子供たちが健やかに過ごすことを願い立てられるものです。府中市内でもかつて多くの場所で、屋根より高く泳ぐ鯉のぼりの姿が見られました。年配の方から、「このあたりの鯉のぼりの棹の頭には籠のような玉が乗せられていた」という話を聞きます。「籠のような玉」は竹で編まれた丸いもので、「籠」「玉」「籠玉」と呼ばれます。下部にある放射状のかざりは「バレン」と呼ばれています（表紙写真参照）。

籠玉の意味について、1915年（大正4）に民俗学者折口信夫が「髭籠の話」という文章の中で、当時の日本各地の鯉のぼりに籠玉があることを紹介しています。そしてそれ自体が神の来る場所の目印だったのではないか？としています。その説の真偽はともかく、籠玉は江戸時代後期以降に鯉のぼりを立てる習慣とともに広まっていたようです。竹で編んだ球状の籠は、天からの福がこの中に入るようにとの願いをこめたものともいわれており、かつては金箔を貼ったものもあったといいます。インターネットで情報を検索すると、茨城県の霞ケ浦湖畔など、現在でもこの籠玉をつけているところがあるようです。

府中市内の鯉のぼり　上部は籠玉でなく、回転球と矢車になっている。【1976年（昭和51）5月撮影】

しかし、籠玉がつけられていたことを知る人は府中市内ではもはや少なくなっています。

府中市内の民俗を調査した北野晃氏の『武蔵府中の民俗』（1988年刊）によれば、昭和40年代（1965～74）は、押立・本町など市内各所で見ることができたといいます。しかし、1976年(昭和51）に市内で撮影された鯉のぼりの写真を見ると、籠玉らしいものは見当たりません。年号が昭和であった間に市内では見られなくなってしまったようです。しかし籠玉は、現在の鯉のぼりにも名残があります。近年一般的になっている鯉のぼりのてっぺんには、金色の風車のような「回転球」と呼ばれる金属でつくられた玉がついています。この回転球が籠玉の名残と言われています。

ところで、現在でも鯉のぼり自体がなくなったわけではありませんが、その多くは最近の住宅事情の影響からか小型化しています。庭のない家や集合住宅で小ぶりのものを立てたり、あるいは折紙や絵ですます家もあるようです。このため、現在府中市内では籠玉どころか屋根より高い鯉のぼりを見ることすら少なくなってしまいました。

そんな中、2006年（平成18）、郷土の森博物館内の復元建物・旧越智家住宅に昔ながらの籠玉をつけた屋根より高い鯉のぼりが新たに設置されました。かつて越智家でも籠玉のついた鯉のぼりをたてていたことがあるといい、昭和40年代以前の府中における鯉のぼりの再現といえます。こうした形で、府中のかつての文化を博物館で伝え続けていくことができれば幸いだと思っています。もちろん今年も4月後半からゴールデンウィークの時期にかけて、この鯉のぼりを立てる予定です。天候が悪いと鯉は泳いでいないかもしれませんが、籠玉のすえられた棹は毎日見ることができます。できれば荒天でない日に、籠玉と泳ぐ鯉のぼりを見に来てください。

（佐藤智敬）

企画展

大西浩次星景写真展
―天・空の記―

4月20日(土)～9月1日(日)
会場：本館2階　企画展示室
観覧無料

天体写真家・大西浩次氏が撮影した、星の風景写真展の第2弾です。第1弾は、2011年（平成23）9月から12月にかけて開催し、好評を得ました。今回の写真展では、大西氏が地上や空、そして天の動きに目をこらし、耳を傾け、その瞬間をとらえた貴重な写真を展示します。

ここでは、その中からタイトル「天・空の記」にふさわしい2点を紹介します。

「天空の城」（左下）は、都会では決して味わうことのできない「眼下の雲」の上に星空が広がり、小屋や周辺のテントの明かりがぼーっと輝いています。宇宙と空そして人の営みが一つに繋がっていることを感じさせてくれる作品です。

「天空の舞、ヘールボップ彗星」（右上）は、あたかも戸隠山の上にあるように見えるほうき星をとらえた作品です。太陽系を巡る彗星の長い旅のハイライトを、鮮明に目に焼き付けてくれます。2013年は、奇しくも期待の新彗星「パンスターズ彗星」と「アイソン彗星」がたった一度の勇士を見せてくれる年でもありますから、まさに時宜を得た作品と言えるのではないでしょうか。

この他、大西浩次氏の写真20点前後を展示いたしますので、作品の織りなす神秘的な世界をぜひご覧ください。　（本間隆幸）

～大西浩次氏談～

地球の大気の底から、私は、 星空の向こうの、はるか遠い宇宙を想像する。宇宙は悠久の象徴と考えられている。

しかし、実際には、非常にダイナミカルな世界もある。 この宇宙の「静と動」の世界を、表現することは 出来ないだろうか。

そこで、私は、音や光、風や雲など、地球の鼓動と星達が織りなす神秘的な光景を記録した。

大西浩次氏ギャラリートーク

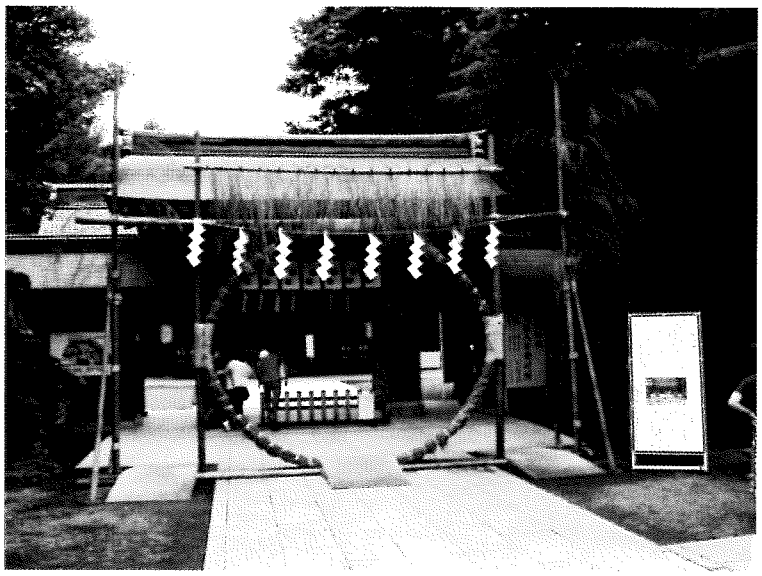
美しい星景写真の数々はどのように撮影されたのでしょうか。それぞれの写真について、撮影時の状況も交えて撮影者本人が解説いたします。

日　　時：8月3日(土)14:00～(予定)
場　　所：博物館本館2階　企画展示室
参加方法：当日自由参加
定　　員：30名

NOTE

蘇民将来の子孫と武蔵府中

佐藤智敬



大國魂神社に６月末頃設置される茅の輪

茅の輪くぐりと蘇民将来の故事

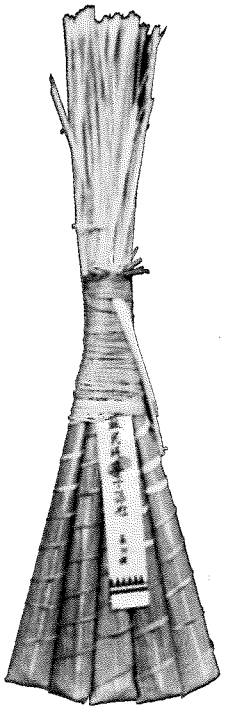
6月30日前後、半年の穢れを祓うための「夏越しの大祓い」が行われる大國魂神社境内には、大きな茅で作った茅の輪が設置されます。訪れた人々はこれを左右に計三度くぐることによって穢れを祓います。2006年（平成18）の茅の輪の前には「茅の輪神事の由来」が次のように記されていました。「和銅6年（713）の蘇民将来の故事から起こったともいわれています。蘇民将来が素戔嗚尊の教えに従って腰に茅の輪を下げたところ、子孫代々に至るまで災い無く栄えたということから、今では夏越しの大祓に茅の輪をくぐり半年の罪穢れを祓い、夏以降の疫病や罪穢れ除けを祈願します」。

ここに登場する蘇民将来の故事とは、次のようなものです。

昔武塔神という神が蘇民将来と巨旦将来という兄弟に宿を貸してほしいと願ったところ、巨旦将来は断りましたが、蘇民将来は貸しました。その後神は再び蘇民将来のもとを訪れ、「茅の輪を腰の上につけなさい」といいました。その夜、武塔神は茅の輪を身に着けていた蘇民将来の子孫以外を滅ぼしてしまいました。以降「後の世に病気などが流行った際、蘇民将来の子孫といって、茅の輪を腰につければその害を逃れることができる」と伝えられました。

この故事にちなみ「蘇民将来の子孫である」と記したお札や茅のかざりを門にかざるようになりました。茅でつくったお守りや門かざり、木の人形など、さまざまな形のものがあります。

また、故事に登場する武塔神は自分の正体を素戔嗚尊であると告げていることから、素戔嗚命を祭神とし、疫病除けを主なご利益とする八坂神社（祇園社）の牛頭天王信仰と結びつきます。右の写真は「祇園祭の粽」と呼ばれるお守りで、7月（旧暦6月）に行われる京都祇園祭で配られるものです。笹でつくられた粽のような形をしており、その正面には「蘇民将来子孫也」と記されています。これも家の入口に掲げる魔除けとされています。



祇園祭で配布される粽

もちろん、京都でなくとも、蘇民将来の子孫という文字を記したお

守り、お札類は全国各地にあり、通信販売されているほどです。ちなみに最近、裸の男たちが「蘇民袋」と呼ばれる麻袋を奪い合う奇祭、岩手県黒石市の黒石寺蘇民祭が有名になっていますが、これもまたその名の通り、蘇民将来の故事をもとにした祭礼です。

府中市域の蘇民将来

蘇民将来に端を発するとされる茅の輪くぐりはあっても、現在、府中市内では蘇民将来と書かれたお守り、お札類が発行されている様子はありません。市外の神社仏閣からいただいてくるという風習もないようです。

しかし、小野宮（現 住吉町）の旧家・内藤治右衛門家で嘉永6年（1853）時点に行っていた年中行事を記した「有原堂年中行事」（当館蔵「本宿小野宮内藤治右衛門家文書」）の節分の箇所に、次のようなことが記されています。「塩鰯の頭を豆殻に挿し、火で焼き、柊の枝に蘇民将来の札をつけて表裏の入口に挿す」。節分の魔除けとして鰯の頭と柊の枝を家の入口に挿すという行事は、現在でも行っている家があります。内藤家では、江戸時代後期にその魔除けにさらに蘇民将来のお札をつけて門に挿していたというのです。そのお札は一体どこからもたらされたのでしょう。

このことに関して、最近発見がありました。2007年、住吉町に鎮座する鎮守・小野神社社殿内にはさまざまな祭具や棟札類が保管されていました。それがどのようなものか見てほしい、という依頼を受け拝見したところ、その中に「蘇民将来子孫門戸也」というお札を刷った版木が一点確認されたのです。小野神社は現在でこそ常駐の神職がいませんが、かつては常駐しており、蘇民将来のお札も氏子に対して印刷、配布していたのだと思われます。内藤家で使用したお札はおそらく小野神社から発行されたものでしょう。しかしながら、現在小野神社を管理されている方々は、蘇民将来のお札の存在をご存じありませんでした。つまり、江戸時代後期には行われていたお札の配布も、近代になり伝承がとぎれてしまったということなのでしょう。

もちろん小野神社以外で発行されたものの可能性もあります。現在発見されてはいませんが、市域あるいはそれ以外の他の寺社で同様のお札やお守りを発行していたかもしれません。その確認は今後の発見を待ちたいと思います。

蘇民将来と野口仮屋の故事

なお、蘇民将来の故事は「神が宿を求め、あるところでは断られ、あるところで歓待され、歓待した者は後に恩恵を受ける」という骨子です。これは大國魂神社のくらやみ祭で行われる「野口仮屋の儀」の舞台・野口家に伝わる、「大國魂神が野口家に宿を求め歓待された結果府中に神が鎮座することになった」という話と通じるところがあるように思います。また、奈良時代に編まれた『常陸国風土記』には「富士山の神に宿を断られた親神が筑波山の神に宿を求めたところ歓待されたため、筑波山を豊かな山にした」という話が載っています。これらは単に似ているだけなのかもしれませんが、あるいは野口仮屋の故事もこうした話を基盤にして成立したのかもしれません。

こうしてみると、現在は蘇民将来の子孫であると記したお守りやお札こそありませんが、風習や伝承という形で「蘇民将来の子孫」は府中市内にわずかながらも足跡を残しているといえるのではないでしょうか。

蘇民将来のお札の版木
住吉町小野神社所蔵。印刷すると右のようなイメージのお札となる。

知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物

⑧田中屋万五郎

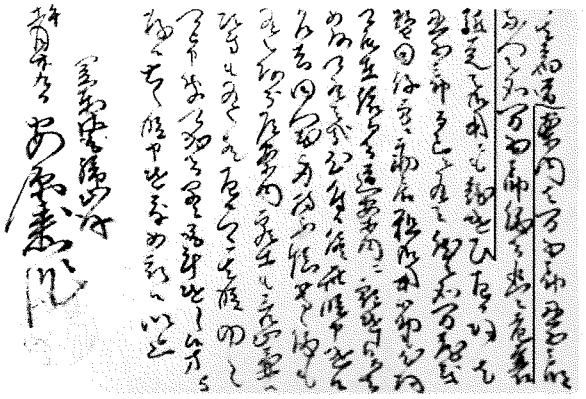
昭和を代表する時代小説家・子母沢寛の『国定忠治』には、府中宿を舞台に忠治が旧知の親分の敵を討つ件があります。そこに府中宿の「目明し」として登場するのが、田中屋万五郎。今回は彼のモデルとなった同名の人物について、お話しします。

実在の田中屋万五郎は、「目明し」ではなく、「道案内」でした。「関東取締出役」のもとで、博徒や悪党などの捕縛にあたるこの役は、皆さんにとってあまり馴染みのないものだと思いますので、まずはその説明から始めましょう。

江戸時代の関東は、幕府領や旗本領、寺社領が入り組み、１つの村の支配が２つ、３つに分かれていることも珍しくありませんでした。犯罪者が他の支配エリアに逃げ込むと、追跡することができず、みすみす取り逃がしてしまうこともしばしばでした。このような状況を打開するために、文化2年（1805）に設置されたのが、関東取締出役です。「八州廻り」とも呼ばれるこの役は、支配に関係なく、関東一帯を取り締まることができました。文政10年（1827）には、関東取締出役体制を強化するために、数十カ村を１つの組合村とし、様々な負担を組合単位で担わすことになりました。この組合村を改革組合村と呼びます。

関東取締出役は村々をまわってはいるものの、各地域の諸事情や、直接犯罪者の顔を知っているわけではありません。そのため、情報を得やすい地元の者の力を借りる必要がありました。その役をつとめたのが道案内なのです。

当初、道案内は村役人がつとめるようにとの通達が出ていましたが、実状は異なっていました。幕府は天保15年（1844）に村役人以外がつとめることを正式に認め、道案内の給金を改革組合村で負担することを命じました。これにより道案内は、正式に関東取締出役体制の末端に組み込まれることになったのです。



万五郎の老衰について記された書状（部分）
関東取締出役から出されたもの。傍線部には、万五郎が老衰のため、「駆走」の御用に使えないとあります。

さて、話を田中屋万五郎に戻しましょう。田中屋は府中宿の本町で文化13年から茶屋兼旅籠屋を営んでいました。いつから万五郎が道案内をつとめていたかは定かではありませんが、天保15年時点にはすでに道案内だったようです。

その後安政5年(1858)、関東取締出役から老衰のため体力を要する用事に使えないと言われ、いったん役を離れたものの、他の道案内の罷免をうけ再度就任したものと思われます。

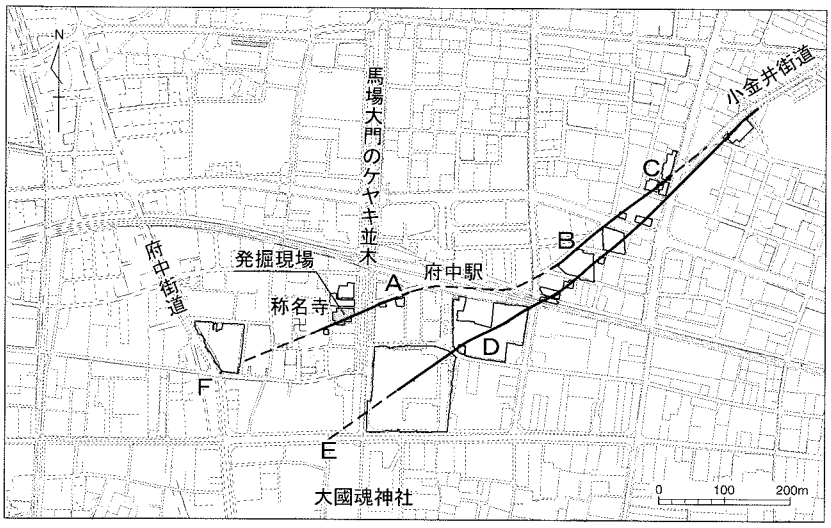
普段は関東取締出役が定詰している内藤新宿にいることが多く、「内藤新宿　田中屋万五郎」と記された手紙が複数残っています。もっとも、事件が起こった際には、遠方まで出張ることもあり、文久2年（1862）5月の夜盗集団の捕縛の際には、甲州（現 山梨県）まで赴いています。これは、上名栗村（現 埼玉県飯能市）の名主宅に10人の夜盗集団が押し込み、5人を殺傷して逃亡したもので、大岳山を越え甲府に向かう途次で、4人が捕まりました。

田中屋万五郎は長きにわたり警護や捕物に従事し、江戸から明治へと移る激動の時代の治安維持に尽力しました。『国定忠治』ではあまり良い人物に描かれていませんが、ここに「目明し」として登場したということは、昭和初期まで彼の名前が伝えられていたということです。それこそが、田中屋万五郎の活躍の証しだといえるのではないでしょうか。　（花木知子）

最近の発掘調査

中世以降の斜行道路跡を発見

宮西町一丁目　府中市ふるさと文化財課　野田　憲一郎



発掘調査で見つかった斜行道路跡と現在の道路

武蔵国府の時代には、役所の中心を起点として東西・南北方位を意識した道路によって国府の地割が設計されたと考えられています。しかし、その地割のほかに南西から北東方向へと斜めに延びる道路跡もいくつか見つかっています。今回ご紹介するのは、新たに発見された中世以降の斜行道路跡です。

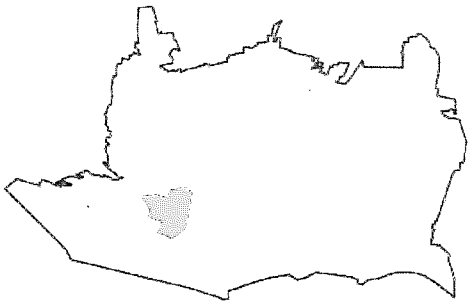
その道路跡は、ケヤキ並木通りの西側に位置する多摩信用金庫府中支店の発掘現場で発見されました。南西から北東方向へ延びる道路跡で、道幅は約2.5～5ｍです。道路の南側には側溝が掘られ、路面は踏み固められたように硬化していました。路面からの出土遺物をみると、中世から近世の土器や陶器があることから、その時代に使われていた道路と考えられます。この道路跡をさらに北東方向へ延ばしてみると、ケヤキ並木から府中駅南口へ向かう現斜行道路（A）と重なるため、この現道は、発掘調査で見つかった道路跡を踏襲したものと考えられます。この現斜行道路は府中駅南口で止まり、それより北側へ真直ぐには延びていません。しかし、明治15年（1882）の迅速測図を見ると、府中駅付近から東方向へ屈曲し、現小金井街道へつながる路線が記されています。現在の地図上においても東に約160ｍ離れた場所から現斜行道路（B）が再び存在し、その延長線上の発掘では道路跡（C）が確認されていることから、これらをつないだラインが迅速測図に残る屈曲した路線であった可能性が考えられます。

では、この道路はなぜ府中駅付近で道筋が変わるのでしょうか。もともと現小金井街道の道筋は、平安時代末に掘られた溝（D）のように、国府の中枢部（国衙）の北西角付近（E）に至る道路であったと推定されます。しかし、今回発見された道路跡は現在の称名寺の参道を通り、さらに延長すると府中街道と旧甲州街道の交差点付近（F）に至る可能性があります。この周辺では中世の遺構と遺物が集中して見つかっており、中世以降の府中の中心地であったといえます。そのため、称名寺の門前を通り、町場へ向かう道として、西側へ道筋が移ったのではないでしょうか。

発見された斜行道路の跡
ケヤキ並木から南西方向を見る。

町にまつわる雑学講座 ～分梅町～

府中市は、1954年（昭和29）に、府中町、西府村、多磨村の1町2村が合併して誕生しました。面積29.34平方キロメートルの中には38の町があります。本シリーズでは、その中からいくつかの町に関する雑学を掲載します。



府中市内には14もの駅がありますが、ふたつの路線が接続するのは2駅しかありません。そのひとつ、京王線とJR南武線が接続するのが「分倍河原」駅です。ちょっと歴史好きならば、合戦の場となった地名と同じだと気付いてくれるでしょうか。そうです、ここは、元弘3年（1333）に新田義貞軍と鎌倉幕府軍が激戦を繰り広げた場所なのです。この分倍河原合戦で勝利した新田軍はさらに南下し、わずか6日後には幕府は滅亡してしまいます。

こうした出来事はさておき、分倍（河原）は駅名になっているにもかかわらず、駅の周囲に同じ町名はありません。

いやいや、字は違いますが「分梅町」が駅や京王線の線路の西側にありました。実は、今でこそ漢字の表記は厳密ですが、かつては音が同じであればかなり自由に用いられていました。例えば、当時、実際にこの合戦に参加した後藤信明という武将が自らの手柄を書き上げた古文書には「分倍原」と明記されていますが、この合戦を含む南北朝時代の内乱を描いた『太平記』という物語には「分陪河原」、鎌倉時代の後期と推定される、多摩川の堤防工事に関わる古文書では「分陪」と書かれています。

ところが驚くことに、江戸時代の後期に著された『四神地名録』『武蔵名勝図会』という書物を見ると、〈かつては「分倍」であったが今は「分梅」と書く〉といった趣旨の記述があるではありませんか。そして、明治初期の地図に書き込まれた字名も「分梅」でした。

ようするに、「ブバイ」の表記はさまざまでしたが、遅くとも江戸時代の後期頃には「分梅」の表記が一般化していたと推測できます。

それではなぜ、駅名は「分倍河原」を採用したのでしょうか。そもそも、分倍河原駅はかつての村の名前を採って「屋敷分駅」として1925（大正14）年に開業。28（昭和3）年に「分倍河原駅」と改称されたのでした（ただし、この駅は現在よりも府中駅寄りにあり、29年に現在の南武線と接続するため、現在地へ移転しています）。

当時、地名表記として用いられていない分倍の字を用い、わざわざ河原を付しているのは、この付近で繰り広げられた、いわゆる分倍河原合戦を意識したからに違いありません。名所・旧跡である古戦場の名が、そのまま駅名となったのでしょう。駅名改称から8年後の1935年には、駅の近くにこの合戦を顕彰する石碑も建造されています（石碑は1988年に鎌倉街道と新田川緑道の交点近くに移設されています）。

このような分倍河原合戦を顕彰する動きは、当時の社会背景とも密接に関係していたと考えられます。1910年（明治43）ころから、南朝と北朝に分かれた皇統のどちらが正統かという問題が持ち上がり、政治論争にまでなっていました。翌11年には、南朝を正統とする議会決議まで行われているのです。新田義貞は後醍醐天皇に従った南朝の忠臣。義貞という人物だけでなく、彼が関連した遺跡もまた顕彰すべき存在として注目されたのでした。まさに時代が、「分梅駅」ではなく、「分倍河原駅」を採択したというべきかもしれません。

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.103 発行日 2013/3/20
編集・発行 公益財団法人府中文化振興財団 府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町 6-32 TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/